

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	西郷文芸学「相変移」論と田中実「第三項」論：「羅生門」における読みの比較分析を通して
Author(s)	高橋, 茉由
Citation	国語教育思想研究, 22 : 31 - 36
Issue Date	2021-05-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050896">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050896</a>
Right	
Relation	



# 西郷文芸学「相変移」論と田中実「第三項」論 —「羅生門」における読みの比較分析を通して—

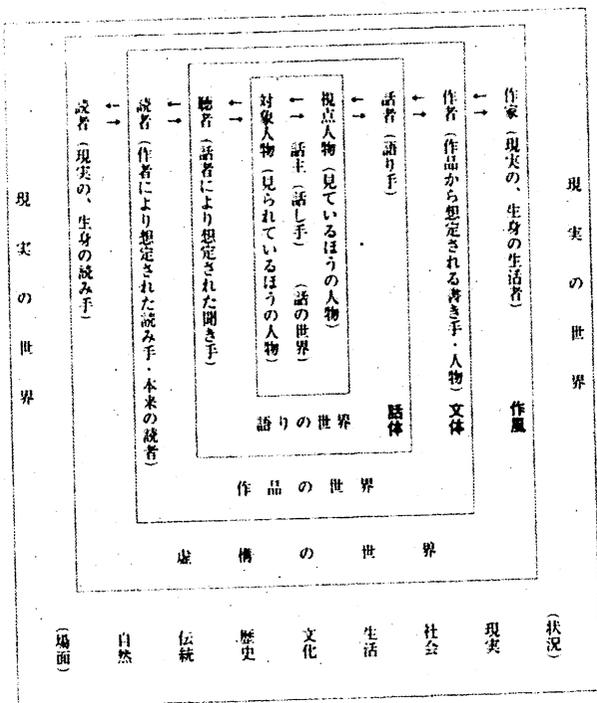
キーワード：語り 視点 認識主体 認識客体

広島大学附属東雲小学校 高橋 菜由

## 1. 問題の所在

### 1.1. 西郷文芸学「相変移」論

西郷竹彦は、2008年に文芸研（文芸教育研究協議会）が刊行している雑誌にて「文芸作品の自在に相変移する入子型重層構造（西郷模式図・モデル）（図1）」を提示し、説明した。



【図1】文芸作品の自在に相変移する入子型重層構造  
（西郷模式図・モデル）【西郷2008a:9】

この理論は、「相変移」という新たな「文学体験」を示したことから、筆者は「相変移」論と名づけた。ここで述べられている「相変移」とは、読者や作家が作品内の様々な人物のポジションに立って「なる」という「文学体験」のことを指す。

この理論の成立過程を明らかにした高橋（2021）の研究をまとめると、「相変移」論は、それ以前の西郷文芸学と比較して、作品構造を「語り」も含めてより精緻に捉えられるようになった点、作家の作品創造に着目することで作品の作り手と読者の「文学

体験」を関連づけ「共同体験」の動きよりも拡張した動きとして捉えた点、作品内の形象が複合化されていると考えたことで読者の読みの体験も複合的に行われると考えた点が総合されている理論である。

これまで「異化」として視点の構造（外の目）によって、第三者として視点人物を批判的に眺める体験は、「相変移」論で考えるならば作品内の人物になって（「相変移」）している状態であると説明できる。西郷の「相変移」論は、作品内の人物同士が共通性と差異性をもった複合的な形象として配置されていると捉えた。読者が作品内の様々な人物に「同化」し、その「同化」した体験を重ね合わせていく「文学体験」を、西郷は「相変移」と捉え直したのである。

「相変移」論の内実を明らかにすることによって、「読者」と「文学作品」との関係性を明らかにすることができ、読者が文学作品をどのように読んでいるかについての知見を得ることができたといえる。読者は、文学作品内の人物（語り手や作者、視点人物等）に「相変移」して（なって）、「相変移」した人物から見ている世界を想像し、想像したものを重ね合わせていく読みを行っているのである。以上のように「相変移」論の内実を明らかにして読者の読みの過程を詳細に捉えられたことによって、教育の場において読者である学習者の読みの過程を想定することが可能になったと考えられる。例えば、教材分析において、読者である学習者はどの人物に「相変移」して（なって）読むのか、というように教材によって読者である学習者の「文学体験」の過程を詳細に想定できるようになった。また、授業においては、読者である学習者の発言や制作物から学習者がどの人物に「相変移」している（なっている）状態

なのか、というように学習者の「文学体験」の状態をみとることが可能になった。体験的な授業をデザインするための知見を得られたといえる。

## 1.2. 田中実「第三項」論

「第三項」論は、田中実が「文学」の在り方を問う中で生まれた理論であり、文学教育の問題を解決するために国語教育の場において提唱した理論であった。『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』を見ると、田中は、「文学作品を「読むこと」のメカニズムの実態は解明されていない」「文学作品を「読むこと」に「正解」があるのか、「ない」のか。こうした基本的問題に全国大学国語教育学会は学会としての共通認識を持っていないと思われる」と問題を指摘する<sup>1</sup>。また、田中は浜本、田中、須貝の座談会において、「「読みのアナーキズム」をどう超えるか（田中、2005:13）」は、「《他者》をどう捉えるか、これが鍵だ（田中、2005:13）」とし、多様な読みをどのように考えるかという問題に答えるためには「「読むこと」のメカニズムの実態を原理的に解明し、文学の可能性を引き出し、その具体的な読みの方法を拓くことが要請されている（田中、2005:14）」と述べている。以上のことから、田中が提唱する「第三項」論は、それぞれの読者がもつ個々の読みをどう捉え、どのように扱うかという問題に対して、応えようとした理論であるといえる。

この「第三項」論は以下で詳しく示すが、「相変移」論とは認識に対する考えが根本的に異なる。しかし、「相変移」論と「第三項」論のちがいについて論じているものは、管見ながら中村（2018）、高橋（2019）の2つにとどまる。また、どちらの論考も、両者のちがいを詳しく究明できているとは言い難い。「相変移」論と「第三項」論がどのようにちがう、そのちがいが文学の読みにどのように表れているのかを明らかにする必要がある。

<sup>1</sup> 丹藤（2013）によると、2004年10月16日の全国大学国語教育学会第107回大会において、田中（2004）が指摘した。その後、田近を中心に批判に答えてきたが、明確な共通認識をもったとは言い難い状況である。

## 1.3. 研究の目的と方法

研究の目的は、西郷文芸学「相変移」論と田中実「第三項」論の相違点を究明することである。そのために、両者の理論における相違点を指摘した上で、「羅生門」の読みを比較する。そして、両者の理論がどのようにちがうのか具体的な読みを通して整理する。

## 2. 西郷文芸学「相変移」論と田中実「第三項」論における文学の読みの比較

### 2.1. 理論の相違点

西郷文芸学「相変移」論は、認識主体が認識対象を認識しているという相関的な認識関係を基盤として理論が構築されている。したがって、文学作品を読む場合も、相関的な認識関係を根拠として読んでいく。文学の読みにおいて認識主体である読者は、文学作品内の人物の立場（視点）に立って、対象を認識し、さらに異なる立場から認識することで、前に認識した対象を包括して認識することでちがう意味を付与すると考える。このように、読者は、認識対象の全体をさらに異なる立場から認識して意味を幾重にももたせていくことで、作品世界を重層的な世界として構築していく。だから、作品構造が重層的な入子型として示されているのである。

一方、田中実は、「私の中の他者」という言葉を用いて認識についての考えを説明する。田中の考えとは、次のようなものである。認識主体は、対象そのものを認識することは一向にできない、なぜなら認識主体が対象を認識した時点で認識対象は認識主体の内に立ち現れるからである（田中実 2018b など）。この考えが基盤となって読みが営まれるため、読みにおいては、認識主体が認識できない部分を作品世界においてどのように描かれているかに注目して行われる。作品に描かれている場合の「認識主体」とは、「語り手」を指す。認識主体である語り手が認識できない部分を、どのように語って表現しているか、それに注目して読むことで、読む過程における認識主体である読者もまた認識できない部分の存在を知

るのである。

では、両者の考えは文学の読みにおいてどのように表れるのか。「羅生門」の読みを比較することを通して明らかにする。

## 2.2. 西郷文芸学「相変移」論を用いた「羅生門」の読み

西郷の読みは、主に2つの過程から行われている。1つ目は、表現形式を「話体」と「文体」に意図的に分けることによって、認識主体と認識対象の相関関係を分別する過程である。なお、「話体」とは、「話者の語り方（西郷, 2009:14）」、「文体」とは「作者の書き方（西郷, 2009:14）」のことを指す。「作者が話者の話体をえらび、話者の語りを先導しながら、作者自身の文体を紡ぎ出していく（西郷, 2009:14）」と説明している。「話体」の場合は、認識主体は語り手であり、認識対象は聞き手と物語内容である。また「文体」の場合は、認識主体は「作者」であり、認識対象は〈作者が想定する読者〉であり「語り手が語った内容」である。

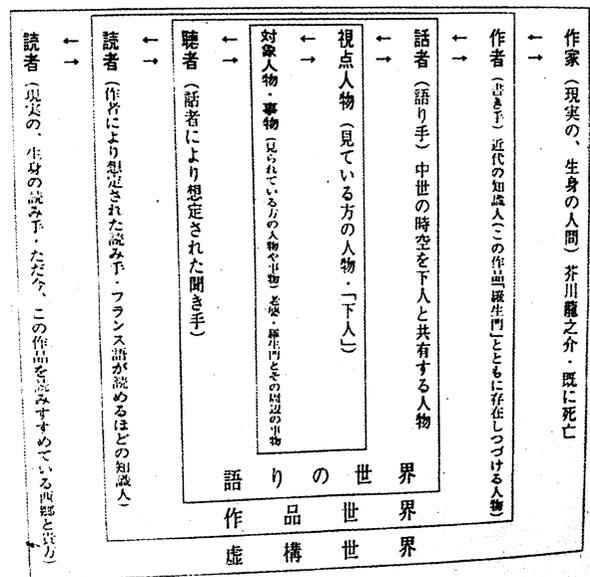
2つ目は、読者と作品世界との結節点となる対象物（形象）を特定することで、読者が作品世界を想像できる根拠を明らかにしている過程である。基本的には、上記の2つによって、意味を分解するとともに統合することで重層的に意味をもたせることが目的である。

まず、語り手（話者）は下人と同じ中世の時間と空間を共有している人物だと西郷は考えている。作者は、語り手（話者）と異なり近代の時間と空間にいる人物だと西郷は想定する（西郷, 2009:10）。そして、「近代の作者が、中世の時代の話者に相変移（よりせい・かさなり・のりうつり・オーバーラップ）し、あるいは「変身」し、中世の時代を生きる主人公下人の様子を目の当たりに見えるように語るところを、近代の作者が、同じく近代の想定された読者に向けて書き進めていく、ということにな（西郷, 2009:10）」と考える。

例えば、「sentimentalisme」や「申の刻下がり」、「何分かの後である」という表現は、「下人の心の屈

折を語る話者の話体（西郷, 2009:21）」を踏まえながら「知識人特有の思弁的な（筆者注：作者の）文体（西郷, 2009:21）」になっていると西郷は説明する。このように、中世の語り手が視点人物である下人について意味づけて語っているものを、近代の作者が近代の価値観で意味づけて文字に表現しているものを、現代の読者がさらに意味づけて読むことで、「二重三重に意味付けが重層する（西郷, 2009:22）」読みが生まれると西郷は説明する。

以上の幾重にも意味をもたせる読みは、次に示すように異なる世界を繋げる形象が存在しているから読むことができるのである。下人の「面皷」は、「中世の人間と近代の人間の双方の心理と行動に共通する指標」になっていることで、2つの時空を1つの世界に統合する結節点を担っているのである。これによって読者も2つの時空を行き来しながら作品世界を読むことができるというのである。この「面皷」がどのように表現されているかによって、下人の心理の変化を捉えることができるとし、西郷は「老婆の自己弁護の言葉は、それまでとつおいつ逡巡していた下人が、逡巡する気持ちを吹っ切り、一步踏み出すきっかけになっています（西郷, 2009:19）」と説明する。



【図2】  
「羅生門」を「相変移」論の構造図に当てはめたもの  
(西郷, 2009b:23)

以上のように、表現形式を根拠にすることで、認識主体と認識対象の関係を時間と空間を基に分断するとともに、分断してある世界を繋げる結節点となる事物（形象）を特定することで、様々な立場から意味を付与しそれを統合するという読みの過程によって作品に重層的な意味をもたせるのである。したがって、作品を読む価値は、読者が様々な立場に移動しながら、幾重にも意味を付与していくことであると西郷は考えているといえる。

### 2.3. 「第三項」論を用いた「羅生門」の読み

田中の読みは、語り手が視点人物や対象人物をどのように語っているか、なぜそのように語っているかを根拠として読むことで、登場人物の各々の世界が同時的に存在していることを捉える過程を辿っている。

田中は「作者」を自称する〈語り手〉とそこに語られた視点人物若い下人と、対象人物老婆との相関、その三者のまなざしの相違に若者のこれからの生き方が見えてくることが示されて（田中, 2018a:73）」と述べる。これは、つまり次の読みの過程を行うことで明らかになる。それは、語り手の語りから、「若者と老婆、両者のまなざし、パースペクティブのあり方によるすれ違いの劇を捉える（田中, 2018a:71）」ことである。

まず田中は、語り手が、死人の髪の毛を抜く老婆の行為を「猿の親が猿の子の虱をとるよう」と一種愛おしささえ感じさせる行為になぞらえて語って（田中, 2018a:72）」いることに注目する。この語りから、老婆が生きている世界は「生きるための食物連鎖の一環（田中, 2018a:72）」として営まれている世界であり、「世間で言う善悪自体がなり立たない場（田中, 2018a:70）」であることだと田中は読む。一方、冒頭の語り手の語りから、下人は「強盗になるか、餓死するか「〈モラル〉の問題」を抱えた秩序内存在（田中, 2018a:70）」であると田中は読む。このように、語り手が登場人物をどのように語っているかを根拠にすることで、登場人物が生きている世界を構築していく読みを田中は行っている。

老婆と下人それぞれの生きている世界を構築することで、それぞれの世界が異なって存在しており、それによって両者がすれちがっていることを田中は読んでいる。田中は次のように述べる。

若者と老婆の二人は日本語（＝ラング）を共有し、会話は成立しても、両者のまなざし、パースペクティブが全く異なって、対話の劇は成立しない、そのために視点人物の若者は自身の中の観念に突き動かされ、それと知らずに「引剥」をして、京の町へ急ぐこととなります（田中, 2018a:71）

下人がなぜ盗人になると決めたのかに対する田中の読みである。先述した西郷の読みとは全く異なっている。西郷は、「老婆の自己弁護の言葉は、それまでとつおいつ逡巡していた下人が、逡巡する気持ちを吹っ切り、一步踏み出すきっかけになっています（西郷, 2009:19）」と説明している。西郷は、老婆の言葉によって下人が盗人になることを決めたと読んでいるが、田中は老婆の言葉が下人自身の心に届いているわけではないと読む。田中は、「面皷面のこの視点人物の若者は既存の秩序内の幼い価値観によって対象人物老婆の世間並みの価値観・世界観を裁断し、強盗をすることは許されている・認められていると錯覚し、京の町に向かう（田中, 2018a:73）」と読み、下人自身が気づいていない下人の深層の心理を読んでいる。このように読めるのは、語り手が登場人物をどのように語っているかを根拠にすることで、登場人物が生きている世界を構築した上で、これらの世界が作品内においてどのように同時に存在しているかを読んでいるからである。

さらに、語り手が、語り手自身の老婆に対するまなざしと、下人の老婆に対するまなざしを大きく異なるように語っている理由について、「失職してまだ日の浅いこのセンチメンタルでナイーブな若者の内なる領域にいかにも正義感の根がないかを見せるため（田中, 2018a:73）」であると田中は説明する。語り手は、このように、「死肉を啄むと同様の行為をする

老婆をセットして、幼い観念が極から極へとその場その場で左右する若者、「俗物」を闖入させ、その視点人物にまなざされた現場がいかなる出来事として現れるか、その出来事を語ることで、世界とその世界に生きる意味とを問おうと（田中, 2018a:73）」したのだと田中は述べる。田中によれば、この問いに答えるためには、作者である芥川龍之介が「〈語ること〉は自身の〈影〉を捉える行為」と自覚し、「虚偽性との対峙・対決」が必要であったが、芥川は道半ばで自ら命を絶ったというのである。

以上の田中の読みは、田中の根底に認識主体は認識対象そのものを認識することができないという認識に対する考えがあり、その問題を文学の世界を創造することでどのように解決しようとしているのかを追究する読みであったといえる。それは、語り手の語りを根拠として、語る対象をどのように語っているのか、またなぜ語っているのかを手がかりとしながら、登場人物の生きている世界を創造し、創造した登場人物の各々の世界が作品内にどのように同時的に存在しているかを明らかにしようとする読みであるといえる。そして、語り手自身が捉えることができている他の存在をどのように、作品内に存在させているのかを読むのである。

読者が文学を読む価値は、文学を読むことを通して、認識主体（語り手であり、文学を読む読者自身）がいかに認識対象を捉えることができないかを知り、その事実に向かいながら、自身の自我を壊すとともに再構築していくことであると考えられる。

### 3. 西郷文芸学「相変移」論と田中実「第三項」論のちがい

「相変移」論をもとにした読みは、相関的な認識関係をもとに、どの表現者（語り手か作者か）から見ている世界であるかを表現形式である「話体」と「文体」を根拠として分断するとともに、分断したイメージを繋げることができる結節点となる「複合形象」に注目することで、意味を統合する読みを行う。そうすることで、作品世界に重層的な意味をも

たせる読みを行う。

一方、「第三項」論をもとにした読みは、語り手が視点人物や対象人物をどのように語っているかを根拠にすることで、登場人物から世界がどのように見えているかを構築する。さらに、その際に構築された登場人物の各々の世界が作品世界に同時的にどのように存在しているかを明らかにする読みを行っている。

つまり、「相変移」論をもとにした読みでは、表現者（語り手または作者）から作品世界がどのように見えているのかを明らかにしようとしており、「第三項」論をもとにした読みでは、各々の登場人物から世界がどのように見えているのかを明らかにした上で各々の世界が作品世界においてどのように同時的に存在しているかを明らかにしている。

以上のように考えた場合、「相変移」論では認識主体が認識することについて、つまり認識する行為そのものについて扱っており、「第三項」論では認識主体がどのように認識してそれがどのように存在しているのか、つまり認識したものがどのように存在しているのかについて扱っていると考えられる。

この「第三項」論に対する見解は、難波博孝（2018:18-29）が田中の論述から「第三項」論が「存在論」について述べていることに注目した考えと共通する<sup>1</sup>。

以上のことを踏まえると、「第三項」論は、認識行為そのものを扱っている西郷文芸学「相変移」論とは異なり、認識したもの（世界）がどのように存在しているのかについて論じている理論であり、文学を読むことを通して、認識主体の認識行為自体をどのように対象化するか、その過程を明らかにしようとした理論であるといえる。

### 4. 研究の成果と課題

本研究の成果は、読みのレベルから西郷文芸学「相

<sup>1</sup> さらに難波は、マルクス・ガブリエルの「新しい実在論」と「第三項」論とを関連づけて考えを発展させている。

変移」論と田中実「第三項」論を比較分析し、両者の理論のちがいを明らかにしたことである。これによって、両者が読みをどのように扱っているのかを明らかにすることができた。

文学教育における授業の場で両者の理論を扱う場合、西郷文芸学「相変移」論は、読者の読みの過程を想定することに適している理論である。しかし、様々な人物に「相変移」して生まれた読者の多様な読みをどのように扱うかについては「相変移」論では述べられていない。一方、田中実「第三項」論は読者の読みの過程を理論として示していないが、読者の千差万別の読みをどのように扱うかについて、自己の認識を問い直すという読みを行うことで扱うことができると論じられている。両者の理論を扱うことで、文学の授業をデザインすることが可能になると考える。

今後は、「相変移」論と「第三項」論を扱うことを通して、文学の授業をデザインする実践的な理論を構築していく必要がある。両者の理論を扱いながら実践を試みたものに高橋（2020a, b）がある。それらの実践を踏まえた上で、実践理論を作りあげていくことが、文学の授業をデザインすることに繋がると考える。

## 引用参考文献

- 西郷竹彦（2008）「文芸（虚構）の世界～西郷文芸学の新展開 その1～」文芸研編『文芸教育』87 新読書社
- 西郷竹彦（2009）「変幻自在な相変移（変身）のメカニズム その複雑・微妙な様相」文芸研編『文芸教育』89号、新読書社、6-29
- 高橋茉由（2018）「子午線 〈第三項〉理論と西郷文芸学」日本文学協会編集『日本文学』12、ひつじ書房、58-59
- 高橋茉由（2020a）「西郷文芸学「相変移」論を踏まえた授業—「水仙月の四日」を教材として—」日本文学協会編『日本文学』3、2-15
- 高橋茉由（2020a）「文学の授業における「文学体験」の成立過程—「白いぼうし」の3コマまんがをかかせる実践の分析を通して—」広島大学大学院人間社会科学研究科『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要・教育学研究』1巻、353-362
- 高橋茉由（2021）「西郷文芸学「相変移」論の成立過程」全国大学国語教育学会『国語科教育』87、刊行予定
- 田中実（2004）「新しい文学教育の地平に向けてⅡ」全国大学国語教育学会第107回大会発表要旨
- 田中実（2005）浜本純逸、田中実、須貝千里 座談会「今日の「教育改革」と「読むこと」の新たな可能性」田中実、須貝千里編『「これからの文学教育」のゆくえ』右文書院、2-83、2004年1月31日に行われた座談会の内容である。
- 田中実（2018a）「『羅生門』の〈読み〉の革命—〈近代小説〉の神髓を求めて—」田中実、須貝千里、難波博孝編『第三項理論が拓く文学研究／文学教育 高等学校』明治図書、62-80
- 田中実（2018b）「〈近代小説〉の神髓は不条理、概念おとしての〈第三項〉がこれを拓く—鴉外初期三部作を例にして—」日本文学協会編集、『日本文学』第67巻 第8号、ひつじ書房、2-17
- 丹藤博文（2013）「3 文学教育研究に関する成果と展望」全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』学芸図書、483-490
- 中村龍一（2018）「芥川龍之介『羅生門』の〈読み方〉—西郷竹彦「相変移仮説」と田中実「第三項論」—」日本文学協会編集『日本文学』67 3月号、27-35
- 難波博孝（2018）「「新しい実在論」と第三項理論」日本文学協会編『日本文学』8 VOL.67、ひつじ書房、18-29